

# 高温に伴う農作物等の管理対策

令和6年5月14日

新潟県農林水産部

新潟地方気象台が5月13日に発表した「高温に関する早期天候情報（北陸地方）」によると、5月19日頃からかなりの高温（5日間平均気温平年差+2.2℃以上）になる可能性があります。また、9日公表の「1か月予報」では、向こう1か月の気温は高く、特に期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

については、下記の管理対策を参考にして、農作物等の管理に十分留意してください。

また、5月は体がまだ暑さに慣れておらず熱中症になりやすいため、農作業の前や最中に水分補給をするなど、意識して熱中症対策を行ってください。

## 1 水稲

- (1) 田植えに際しては、苗の葉の萎凋が生じないように、水田への搬出後も必要に応じ育苗箱にかん水する。
- (2) 高温時は除草剤による薬害が発生する場合がありますので、使用予定の除草剤のラベルを確認し、高温時に薬害が発生しやすい表示のある除草剤は使用を控える。また、高温により雑草の発芽や生育が早まるため、雑草の発生状況を観察し、除草剤の散布適期を逃さないようにする。
- (3) ワキの発生が多い場合は、夜間落水により土壌へ酸素を供給し、根腐れを防ぐ。
- (4) 高温により初期生育が良い場合、分げつが旺盛となり茎数が急激に増加するため、中干しが遅れないようにする。

## 2 大麦、小麦

- (1) 高温や土壌の乾燥を受けた後に湿害を受けると成熟期に達する前に枯れる恐れがあるため、排水溝の再点検を行い、最適な土壌水分の維持に努める。
- (2) 小麦の赤かび病の適期防除を徹底する。  
1回目は開花期（出穂期の7～10日後頃）、2回目は1回目の7～10日後頃、3回目は2回目の7～10日後である。
- (3) 高温により成熟期及び収穫適期が早まることが予想されるため、適期に収穫・乾燥・調製作業が実施されるよう施設・機械の準備を行う。

## 3 園芸全般

- (1) 病害虫発生予察情報に留意し、生育ステージに応じた適切な病害虫防除に努める。  
なお、高温時の薬剤散布は、薬害発生の恐れがあるので避ける。
- (2) 気温の上昇に伴い、施設ではコナジラミ類、アザミウマ類、ハダニ類、露地でもアブラムシ類などの害虫が増加する恐れがあるので、早期発見・適期防除に努める。
- (3) ハウス内の急激な温度上昇後、一気に換気を行うと、葉や生長点のしおれ、葉焼けなどの障害が発生しやすくなるため、こまめな換気や遮光により温度管理を徹底するとともに、積極的なかん水で乾燥を防ぐ。

## 4 野菜

### (1) 施設野菜（トマト、きゅうり、いちごなど）

- ア 施設栽培は、高温による障害発生回避のため、換気や遮光資材の使用により、ハウス内の温度を下げる。
- イ 育苗中の苗類は、25℃を目安に換気を行いハウス内の温度を下げ、こまめなかん水や遮光により、しおれさせないように管理する。
- ウ きゅうりは、こまめなハウス換気等により急激な温度変化を避け、葉焼けにも十分注意する。
- エ トマトは、着果負担によりガク枯れや葉先枯れが発生しているほ場では、枯れた部分から灰色かび病や葉かび病などの病害が発生しやすくなるため、換気により適切に温度・湿度管理をする。また、必要に応じ内張カーテンによる遮光等を行う。病害が発生した場合は、葉かきや花びら取り及び罹病葉の除去を行った後に防除を行う。
- オ いちごは、ハウス内温度を下げるため換気を強めるとともに、吸水量の増加に対応するため、葉がしおれないよう1回のかん水時間を短くし、回数を多くする。高温下では果実の品質低下が著しいため、適期収穫に努めるとともに収穫後の取扱いを丁寧に行い、果実の損傷を防止する。
- カ ハウスすいかは、日中 30℃・夜間 15℃を目安に換気量を調整する。日中に葉のしおれが生じないように、晴天時には朝にチューブでかん水する。また、急激な換気による葉焼け及び脱水に注意する。

### (2) 露地野菜

- ア 定植期のほ場では、高温乾燥により葉焼けや活着遅れが懸念されるため、適切にかん水する。なお、かん水設備がない場合は、定植時に植え穴にかん水する。
- イ 育苗中のえだまめは、は種直後の高温による発芽不良を防ぐため、遮光資材等を使用して温度上昇を抑える。
- ウ すいかのトンネル早熟作型及び密閉トンネル作型は、高温による葉焼けに十分注意する。
- ・晴れて高温が予想される場合は、朝にチューブでかん水する。
  - ・密閉トンネルでは、換気穴を増やす。
  - ・トンネル整枝栽培では、通常より換気量を多くする。
- エ ねぎのチェーンポット育苗の定植では、定植ほ場の土壌水分が少ない場合は、土壌の乾燥を抑えるため、定植日に定植溝を作る。
- オ アスパラガスは、土壌の乾燥により萌芽の抑制や品質が低下するため、生育が停滞しないよう必要によりうね間かん水を行う。
- カ さといもの定植後マルチ被覆栽培は、出芽した芽を焼かないようにほ場を見回り、芽を確認したら速やかにマルチ部分を切り開く。
- キ そらまめは、ほ場が乾燥しているようであれば、うね間かん水を行う。

## 5 果樹

- (1) 今後の高温で生育が早まる可能性があるため、生育に合わせた各種管理作業や防除等を適期に行えるよう計画的に準備を進める。
- (2) ぶどう、日本なし、いちじくなどの施設栽培は、ハウス内の高温による生育障害を受けやすいので、換気による適切な温度・湿度管理に努める。
- (3) 降雨が少なく乾燥した状態が続く場合は、適宜かん水する。特に、本年定植した苗木等は、根圏が狭く乾燥に弱いため、優先的にかん水する。
- (4) モモ等、梅雨明け以降の高温により骨格枝背面の日焼けが懸念される樹種においては、骨格枝背面から発生する不定芽等を適宜残し、日焼け防止に備える。

## 6 花き

- (1) 球根養成は、土壌が極端に乾燥しないように適切にかん水する。特に砂丘畑など乾燥するほ場では、スプリンクラーで定期的にかん水する。
- (2) 切花及び鉢物などの施設栽培は、高温や強日射により葉焼け等の生育障害が生じやすいので、遮光資材の使用や換気等により適切に温度・湿度管理を行う。また、土壌が乾燥しないよう土壌水分に注意し、適切にかん水する。

## 7 畜産

- (1) 天気予報に注意し、急な気温上昇に伴う家畜疾病を予防するため、換気・送風・寒冷紗・屋根への塗装等の暑熱対策を早めに準備する。特に、換気扇、送風機は支障なく稼動するよう、ほこりを落とし、ベルトの張り、注油などの点検、電気系統の具合もチェックする（掃除をすることによって、風量も含めて効率がアップする）。
- (2) 野生生物の侵入防止策を徹底しつつ、畜舎の通風をよくするために開口部はできるだけ開放し、空気の流れを妨げるものを除去する。
- (3) 搾乳牛は畜舎内の温度が 20℃を超えたら暑熱対策を実施し、家畜の体感温度の低下に努める。
- (4) 家畜の観察を励行するとともに、餌槽や飲水設備をこまめに清掃・点検し、新鮮な飼料・飲水が確保されるように努める。

## 8 きのこと

- (1) ハウス内の高温による生育障害を防ぐため、換気による適切な温度管理に努める。
- (2) 換気をする場合は、害菌・害虫の進入防止対策に努める。
- (3) 害菌の早期発見に努め、汚染された菌床は速やかに撤去する。
- (4) 高温下では、きのこの品質低下が著しいので、適期収穫に努める。
- (5) 収穫したきのこは、速やかに保冷库等で保管する。
- (6) 仮伏せ中のほだ木をシート等で被覆している場合は、通風、日除け、散水などで温度管理に努める。
- (7) その他、極端な温度変化による影響の早期発見に努め、適切に対応するよう留意する。